

訳者あとがき

司祭フランシス 小林史明

2年前、最初の「フィリピンの神話と伝説」を訳したときは、その内容が、特に聖書との良く似た話などが印象に残り、それを年賀状で紹介したり、翌年のフィリピンキャンプでの日曜日の説教などに使わせてもらいました。その時の印象は、神様は、教会を通さなくても、直接人々に働きかけられる、ということでした。

キリスト教がフィリピンに入る前から、同じようなメッセージを、フィリピンの古くからのお話を通して、語られているように感じたからです。

今回、似たタイトルの、この本を訳してみました。中には、前のものと類似した話もありましたが、どちらかと言うと、今回のものの方が、簡潔に、そして素朴に語られている印象があります。そして、私自身、聖書やキリスト教という先入観を取り入れず、物語そのものに向き合う気持ちで読み進めたように思います。

印象的だった話をふたつ話します。

ひとつは、31話の、フィリピン人はどうして平らな鼻なのか、という話です。

物語は、フィリピン人は背が低く、走るのが遅いから、鼻の争奪戦に負けて、残った平べったい鼻しか手に入らなかった、と説明します。

私はこの結論に、びっくりしてしまいました。人間一般を説明するならともかく、自分たちの民族を説明するのに、他より劣ったような評価の話堂々と語り継ぐのは、どういうわけでしょうか。

私は最初は、スペイン人による300年以上の支配により、自分たちを、鼻の高い西洋人よりも低く見てしまう、「奴隷根性」が出来上がったのだろうか、と思いましたが、どうも、そうではないのではないか、と思い返しました。

「鼻が低い」と言えば、私たち日本人も同じなのですが、日本人はそれを「良し」とはしないで、「鼻を高くする」などということわざもあるように、必死で高い鼻にするよう、努力してきたように思います。経済力をつけて、欧米に追いつき、追い越せ、ということで走ってきました。

また、最近の東南アジアの経済発展は、やはりそれがあのように思います。私たちが使っている

訳者あとがき

パソコンなどは、マレーシア、インドネシアなど東南アジアの製品です。ところがそんな中において、フィリピンだけが、経済成長から取り残されているように思えます。

でも、実は、その競争しない、背が低く、走るのが遅いことの方が、価値があるのではないか、ということ、私はフィリピンの人々との関わりの中で感じてきているのです。

今年のワークキャンプは、教会や牧師館のペンキ塗りでしたが、作業は日の出の頃と、夕日が沈むころだけでした。汗水垂らして、必死に働くのが、ワークキャンプと思っていたけど、日の照る真昼に働くのは、愚かなことらしいのです。

今年の夏、熱中症で大勢が倒れた日本。競争心を煽られて、今まで生きてきたことは、結局、地球の温暖化を進めるだけだった、みたいなことを感じています。

与えられたもので満足し、オリンピックで金メダルなど取ろうとしない、フィリピンの人々から、多くを学べるのですが、この伝説などが、それを物語っているように思えました。

もうひとつは、43話の最初の猿の話。私たちは、猿が進化して人間ができた、と考えていますが、この話では、人間がわがままに、優しさや思いやりがなくなった時、猿が誕生した、という何ともユニークな発想に驚きました。

人に親切にしない人が、罰を受けるのは、よくある話ですが、その罰が、人間に似た姿で、人間のように振舞っている猿になる、というのは、何が言いたいのでしょうか。

これは、猿を笑っている話ではありません。(少なくとも、私はそう思います。)自分のことだけ考えて、他の人への配慮がない人間は、姿こそ人間のようだけど、中身は、欲望のままに生きている、猿に過ぎない、と、フィリピンの人たちは、子どもに語り継いでいるのではないかと私は考えます。

もちろん、このほかに、いろいろ面白く、私たちに生き方を考えさせるものがたくさんあります。

どうぞ、楽しんで読んでください。

訳文で、わかりにくいことなど、ありましたら、お知らせください。